平成８年度厚生省心身障害研究
「ハイリスク児の発達支援（早期介入）システムに関する研究」
第１回班会議議事録
平成８年６月１４日（金）午後２－６時
慈恵医大高木会館　Ｈ会議室

出席者：前川、山口、堀内、神谷、諸岡、南部、庄司以下３３名

１．本研究の背景と主旨について前川より説明がなされた。

２．研究計画の概要について庄司より説明がなされた。

３．研究協力者の役割分担の決定：研究協力者の自己紹介と今までの研究をもとにして役割分担を以下のように決定した。

研究計画

分担研究　１　：　ＮＩＣＵ入院中の介入と退院後の連携

入院中の介入をすでに行なっている病院の方法と効果

退院後に向けて、保健所との連携の在り方の検討

親の心理状態についての調査と支援

担当者：南部、堀内、吉永、宮尾（本間）、喜田、副田

分担研究　２　：乳児期（toddler age）の介入システムの確立とその効果

歩行までの介入の方法の検討と、実地のためのチームずくり

医療・保健・福祉の連携の在り方（病院・保健所・保育所等）の検討

介入の実地とその効果の評価

担当者：諸岡、竹内、上谷、奈良、中農、喜田、犬飼、今泉、宮尾、副田

分担研究　３：幼児期の介入システムの確立とその効果

前回の研究班の再検討（就学後の発達など）

介入方法による効果の違いの検討

担当者：山口、諸岡、奈良、犬飼、川上、宮尾、神谷、松石

分担研究　４：ハイリスク児の地域ケアの在り方の検討

入院中から、介入を経て、地域ケアへつなげていくシステムモデルの作成

担当者：恒次、秦野、庄司、青木、前川

4．研究グループの責任者を次のように決定した。

グループ　1　：　南部

グループ　2　：　諸岡、宮尾

グループ　3　：　神谷、松石

グループ　4　：　庄司

5。平成8年度研究計画：各グループともに現在までに行なっている方法を纏め再検討をおこなうと共に文献的まとめをおこなう。　各グループ共にＮＩＣＵを持つ病院、保健所、保健センター、療育機関などとの連携による支援システムの具体的作成を心懸ける。

前回の前川班で早期介入を行なっていたグループは3年生での発達チェックをおこなう。

前回のハイリスク児発達評価のグループはプロトコールの再検討もおこなう。

6．発達支援システムの検討：協力班員が各施設で行なっている支援方法とその問題点につき、紹介と討論を行なった。

7．2年度以後の研究計画の大要

2年度は各グループともに初年度に作成した方法、システムで支援をおこなう。

3年度はそのまとめと評価をおこない、その結果に基ずいて支援のための次の三つのマニアルを作成する。

1）ＮＩＣＵ入院中の発達支援のマニアル

2）退院後から歩行開始（やく2歳）までの早期介入のマニアル

3）幼児期の発達支援のマニアル

4）各地域における支援システム・モデルのマニアル

8．次回班会議日程

第2回：平成8年9月7日（土）午前9時－17時
　午前：グループ別班会議
　午後：全体会議

第3回：平成9年2月1日（土）

平成８年度厚生省心身障害研究

「ハイリスク児の発達支援（早期介入）システムに関する研究」

第２回班会議議事録

平成８年９月７日（土）午前１０時～６時

東京慈恵会医科大学高木会館D1，D2，E，F会議室

出席者：前川，山口，堀内，神谷，南部，青木以下35名

Ⅰ.午前中（10～12時）グループ別討議

各グループに別れ、それぞれのテーマについて討議がなされた。

グループ１： NICU入院中の介入と退院後の連携（責任者：南部）

入院中の介入をすでに行なっている病院の方法と効果

退院後に向けて、保健所との連携の在り方の検討

親の心理状態についての調査と支援

担当者：南部、堀内、吉永、本間、喜田その他

グループ２： 乳児期（toddler age）の介入システムの確立とその効果（責任者、諸岡、宮尾）

歩行までの介入の方法の検討と実施のためのチームづくり

医療・保健・福祉の連携の在り方（病院・保健所・保育所等）の検討

介入の実施とその効果の評価

担当者：諸岡、竹内（小西）、上谷、奈良、中農、喜田、今泉、宮尾、副田その他

グループ３： 幼児期の介入システムの確立とその効果（責任者：神谷、松石）

前回の研究班の再検討（就学後の発達など）

介入方法による効果の違い、方法と評価法の検討

担当者：山口、奈良、犬飼、川上、神谷、松石

グループ４： ハイリスク児の地域ケアの在り方の検討（責任者：庄司）

入院中から、介入を経て、地域ケアへつなげていくシステムモデルの作成

担当者：恒次、秦野、庄司、青木、前川、犬飼、石川

グループ２，３は途中より合同で討議がなされた。

Ⅱ.全体会議（E会議室）午後1～6時

１．NICU入院中の支援と退院後の連携

カンガルー法について堀内よりスライド、ビデオ（コロンビア、ユニセフ）をもとにして紹介があった。現在32週よりおこなっているが、これにより、無呼吸発作の減少、静睡眠の増加、体重増加率の上昇、好ましい愛着形成など、非常によい点がみられている。自治医大よ

りはNICUにおける音,光などの環境の整備についての問題と疑問点の報告があった。NICUは現在のままで良いのか。ついで松戸市立病院よりマンモスNICUの中で、大切なタッチングの質、量をもっと意欲的におこなわなければいけない。聖マリア病院では赤ちゃんマッサージとNICUの保母についての役割と意義、育児支援研究会、育児サークル、親の会の紹介があった。南部より過去10年以上にわたっておこなわれているNICUにおける母子の早期接触、母親に対する指導についての紹介があった。現在このグループでおこなわれているいろいろの方法を新生児、母親について括める予定である。また、NICU入院時の保健所への連絡についても今後検討していく予定である。すでに九州では産婦人科から小児科への、紹介状の統一とともに、保健所への情報の流し方について検討をおこなっている。

2．乳児期（toddler age）の支援システムの確立とその効果

歩き始めるまでは各機関でフォローアップがそれぞれの方法でおこなわれている。この方法について紹介があった。歩き始めまでは、フォローアップが中心であるが、この中に、如何にして母親の支援や母親同士の交流を組み込むかが大切であることが話し合われた。また、NICU退院のハイリスク児の地域の保健所や、保健婦との連絡並びに交流が不十分であることが話題となり、これからこれらを含めて、退院後から歩き始めるまでの支援を如何におこなうかについて話し合いがなされた。

3．幼児期の支援システムの確立とその効果

前回の早期介入の結果をもとにして幼児期の早期介入の3つの問題点について提示と検討がなされた。

①早期介入（EI）の効果の評価方法とコントロールを如何に設定するか

前回よりも問題点がなげかけられた

EI群とコントロール群のバックグラウンドをどうそろえるか

（DQ，Socio-economical，養育環境、その他）

（EIに入る前に親への共通の質問紙を作成する）

現在聖隷浜松で使用している運動機能発達グループへのお誘いを参考とする

質問項目は（1部、2部より構成されている）（参考1の1部は全員記載）記入してもらって（EI、control)に分けるかがDQ，Socio-economicaは最低チェックし余り1施設で偏りのないようにする。

②EIの評価方法（発達評価，DQ，行動，親の意識，その他）

DQ：新版K式，津守稲毛、磯部が妥当か、もっと良い評価方法はないのか？

個々の領域の分析：運動面のEIの伸びがあった等

親の意識、行動評価法：以前使用した物を変更した

前回のは原先生作成のをそのまま使用

（前回のは自閉症や障害をみつける為に原先生らにより作成されたもの）

③各地のEIの在り方

遊びの内容の理論づけ　EIとしてどういうことをやったか

内容、回数の問題、施設によりばらばら

理論的背景の設定　　例

感覚統合（内容は各施設にまかせる）

ムープメント教育など

また、前回の小学校入学後のフォローアップなどもおこない、まとめることなどが話し合われた。

4．ハイリスク児の地域ケアの在り方

(1)モデルを作成する前に、実態調査として次のことをおこなう

a.早期介入のためのNICUに関する調査

b.お母さん方へのアンケート

アンケートの（案）が提出され検討された。

(2)埼玉県地域療育相談システムについて

青木、石川よりデータをもとにして説明があった。

(3)平成８年度より実施されている石川県の「大きくなあれ未熟児総合ケア推進事業」について前川より説明があった。この事業はNICU入院中の地域保健婦のNICU訪問、退院後の支援、未熟児のかかりつけ医紹介、フォローアップ健診、フォローアップ教室（支援）、支援ケース検討会「大きくなあれ親の会」の育成と支援などよりなっている。

最後に平成８年度は各グループにおいて現在おこなわれている支援の方法と、問題点と、今後の方法を括めることとした。なお、今年度も前回の班研究でできなかった括めもさらにおこなう予定である。

5．次回の第３回班会議は平成９年２月１日（土）慈恵医大で開催する。

平成８年度厚生省心身障害研究

「ハイリスク児の発達支援（早期介入）システムに関する研究」

第３回班会議議事録

慈恵医大　小児科

前川喜平

平成９年２月１日（土）午後２時～６時３０分

東京慈恵会医科大学高木会館５階E会議室

出席者：前川，山口，諸岡，堀内，神谷，庄司，南部，青木，飯田以下37名

１．NICU入院中の介入と退院後の連携

堀内らはカンガルー法について方法、効果などについて発表した。在胎32週以上、母親が希望した場合におこなうが、体温、酸素濃度などカンガルー哺育中はむしろ安定し心配はない。父親のカンガルー法により“のめり込み”（父親の育児への参加）が積極的となる。また、NICUの面会や看護婦さんの態度、光音などについて喜田、本間らの報告があった。吉永は療育課設立の目的、実際の症例について報告した。南部はNICU中の母親の支援について「プレママふれあい教室」「子育てのしおり」の資料をもとに報告した。未熟児室入院中の保健所への連絡について討議がなされ、石川県の入院中の保健婦のNICU訪問制度について説明があった。

２．乳児期（toddler age）の介入システムの確立とその効果

この問題について諸岡、竹内（小西）、上谷、中農、喜田、今泉、川上、宮尾、副田らの報告があった。退院後よりグループを作り指導しているもの、６カ月頃よりおこなっているもの、１歳前後よりおこなっているものなどがある。介入中に障害が発見され療育に紹介された例などが報告された。また早期よりの介入、支援の方法について検討がなされた。神戸医大と地域が協力しておこなう素晴らしいシステムや、今まで、そのようなシステムがない福井の場合の方法なども紹介された。

３．幼児期の介入システムの確立とその効果（神谷、松石、山口、犬飼、川上、前川）

聖隷浜松では完全なコントロールをとって早期介入を試みている。介入群、非介入群について学歴、経済状態、家族構成などの対比が示されたが、全ての面で、完全なコントロールを設定することはできない。日赤では、１歳前と２歳以後（歩き始める前と後）の２つのグループについて早期介入をおこなっているが、遊びについては、自由遊び、集団遊び、親子遊びなどを適当に組み合わせる必要がある。遊びの内容については子どもが興味を示すものを主体とするが、その範囲内で発達の促進につながるものがよい。早期介入中の観察を通して、親子関係、母親の態度、子どもの発達などいろいろのことが判断される。指導については、こちらが、主題を決めて母親に話をするのと、お茶を飲みながら親たちの質問に適当に答える、介入中に親たちと話すなどいくつかの方法があるが、いずれにしてもこちらから積極的

に指導する姿勢は好ましくない。

極低出生体重児の就学後の発達について、前川らは、微細神経徴候、WISC-Rなどの結果からは学習障害が疑われるのに、実際には問題のみられない症例が存在している。親の受け入れ方によるのではないか。

4．ハイリスク児の地域ケアの在り方の検討（庄司、恒次、前川、青木、飯田、奏野）

石川県の「大きくなあれ未熟児総合ケア推進事業」について飯田の報告があった。極低出生体重児の早期支援を平成８年度より県の事業として①未熟児保健・医療連携事業、②大きくなあれフォローアップ事業、③未熟児育児支援ケース検討会、④「大きくなあれ親の会」の育成と支援、４つの柱でおこなっている。NICUの保健婦訪問は平成８年９月より実施されたが、その実情が報告された。青木は埼玉県の支援システムについて紹介があった。石川県と違い県の事業としては、保健婦のNICU訪問は施行していないが、ハイリスク児のフォローについては保健所でおこなっている。医療機関との連携が不充分である。

庄司、恒次は主なNICUにおける入院中、退院後の支援システムのアンケート結果についてのまとめを報告した。支援システムについては種々であるが、ボランティアが主で経済的裏付けがないことが問題であるという解答がみられた。

5．その他

全体班会議（２/１４）、会計報告、報告書などについての事務連絡があった。

※ハイリスク新生児発達評価については昨年作成したスコアーの見直しをおこなうこととした。